

謡曲『石橋』の総合的研究 Synthetic Research on the Noh Play “Shakkyo”

聖心女子大学大学院文学研究科 人文学専攻 雨宮久美

序章

政所執事代の蝮川親元の日記の寛政六（1465）年三月九日条に、三世観世太夫の音阿弥が時の將軍足利義政の前で数曲を演じたことが記録されている。その演目の中に『志々』の名前が見える。これが能『石橋』について記した最も古い記録であるという説がある。本研究では、「獅子」の観念と密着に結びつきながら現在では『石橋』という演目名で定着している謡曲作品を取り上げ、様々な史料や伝承、また民俗事象などを検討しながら作品の根底にある日中の重層的な文化的伝統に光を当てて、作品の主題を浮き彫りにすることを目的とした。

論文全体を通して、『石橋』という作品の短い詞章の背景に広がる能作者の知識世界や雑信仰、また伝承や民俗的事象の多様な契機がどのように融合して作品化されていったのかという根本的な問題を見据えつつ、その問題の解決の前提となる予備知識や基本となる資料を詳細に検討していった。

鍵となる言葉は、「寂照」・「清涼山」・「五臺山文殊菩薩信仰」・「樵翁」または「童子」・「石橋」・「獅子舞」・「獅子と牡丹」である。これらの言葉を手がかりに、『石橋』の作品世界の背景にある文化史的な位相について考察してゆく。以下、各章の構成と内容をまとめる。

第一章 ワキ「寂照法師」の人物像

——大江定基（寂照）に関する史実と説話——

この章では、寂照の人物像を明らかにしてゆく。まず、寂照がたどった人生を客観的に捉えるため、寂照関連の史料を検討する。史料から読み取れる寂照の人物像は、後年の「三吳道俗以歸嚮」と評される高僧のイメージとはかなり異なる側面を持っている。この落差のなかから、寂照説話の形成過程と説話化に働く心意を考えてゆく。『石橋』には、高僧の寂照でも石橋のかかる谷のあまりの深さを前にして思わず足がすくむさまが描かれている。橋の向こうにある「文殊浄土」への至り難さが、一瞬にして現出する。ここに聖なるものの顕現の劇的な構造を読み取ることができる。

謡曲『石橋』のワキ寂照法師（大江定基）に関して、史実と説話の接点を主に検討したこの章での結論は次の通りである。

寂照の歴史的実績が後世になるほど曖昧になってゆくと、説話の世界を通じてイメージが逆に膨らんでゆく。その想像の広がりの中で、人間味のある寂照の説話的な人間像が形成され、内心の葛藤の末の出家の動機や霊山での文殊菩薩示現の目撃譚など、印象的な話柄として民間に普及していった。

第二章 聖地清涼山

強い信仰心から求法のために唐に渡った寂照(ワキ)が、念願の「清涼山」への参詣を果たす場面から『石橋』の世界は始まる。

『石橋』の舞台背景として設定されている中国山西省五臺山の文殊信仰について本章で検討する。五臺山は、神仙道の霊場、聖域として古くから信仰されてきたが、中国での仏教信仰の浸透とともに華嚴経の道場が変わった。唐代になると、文殊菩薩の住处として清涼山(五臺山)は衆庶の信仰を集めるようになり、『広清涼伝』に見られるような文殊菩薩の示現など、さまざまな靈驗譚が生まれた。唐代、文殊菩薩信仰を五臺山に根づかせた不空三蔵の大きな役割についても史実から検証した。

さらに五臺山に巡礼し文殊菩薩の靈驗を目睹した円仁が、日本に文殊信仰を伝えた歴史的意義を考察した。円仁が礼拝した文殊菩薩が馭者と供養童子を伴った騎獅文殊三尊像と推測されることも大きな意味を持つ。

第三章 日本への五臺山文殊菩薩信仰の将来とその流布

日本に仏教が伝来した初期の段階ですでに文殊菩薩信仰は伝えられていた。唐や宋との交流が盛んになる時代になると、天台山と五臺山は、求法また巡礼を志す渡海僧たちの聖地となって、憧憬の対象となった。入唐入宋僧らの尽力により、日本に文殊菩薩信仰が根付いていったことを本章では考察する。

日本で文殊菩薩は、時代とともに民衆に身近な仏となってゆく。その背景にあったのは渡海僧たちの厚い信仰の歴史である。五臺山聖地信仰や文殊信仰の形成に果たした渡海僧らの役割を跡づけることにより、文殊菩薩信仰の日本独自の展開を検討した。日本には、行基を文殊菩薩の化身とするなど、独特な説話的展開が見られる。そもそも、謡曲『石橋』の創作は、文殊菩薩信仰が室町時代の能楽師たちにとって身近なものでなければあり得なかった。

「先巡禮天台、更攀五臺之遊、既果本願」と寂照に宛てた藤原道長の書簡にもある。文殊菩薩の霊場「清涼山」を実際に巡礼した寂照を登場させることにより、『石橋』は宗教的な超越的世界と現実世界とが相渉る境界領域を舞台上に再現した作品だと分析した。

第四章 中国の説話と詩文に見る「童子」と「翁」の形象

『石橋』の前シテは文殊菩薩の浄土と此岸とを取り結ぶ媒介者であり、「童子」か「樵翁」のどちらかの設定で登場する。本研究では、そのいずれが本来的なのかを検討するのではなく、相補的な文化的事象として本章と事象において両者を取り上げる。本章では最初に中国における「童子」と「翁」の形象を論じる。

中国古典に出てくる童子として印象的なものに、爛柯の説話がある。樵の王室が山中で童子たちが囲碁を打つのを見ていたら柯の柄が腐るほどの時間が経っていたという話である。しばしば神的な存在として描かれる中国古典の童子像の一典型である。

前シテとして「樵翁」が設定されるのは、『石橋』中の「山路日暮れぬる樵歌童笛の声」の詞章に由来するからである。中国古典詩における樵像の変遷を追うと、山中の生活者に過ぎない樵夫が、唐代以降、隠者のような精神的存在として表象されるようになったことが分かる。童子も翁も聖なるものに近い存在であることを六朝志怪や唐詩から論証した。童子が不思議な力を持ち、神的なものに近い存在であったことは、『搜神記』などの志怪小説から考証した。続いて、樵翁が唐代に入り理想の境地に達した隠遁者の形象で描かれるようになったことを、王維の詩などを中心に論証した。童子も翁も聖なるもの、あるいは

聖なるものに近い存在として中国の古典文学では描かれていることを本章では確認した。

第五章 中世日本における「童子」と「翁」の形象 ——聖なるものの象徴として——

前章を承け、本章では中世日本における「童子」と「翁」を取り上げる。

具体的には、中世社会において相互に補完的な存在であった「童子」と「老翁」の関係について検討した。「童子」も「老翁」も、俗なるものと聖なるものとの双方に関わって象徴されている。日常生活を担う成人と対をなすのが童子と老翁の存在である。日常性からの脱却や聖なるものの象徴として両者が捉えられていることを、史料などに基づきながら跡づけた。

『石橋』作者は、文殊菩薩の使獣である獅子の後半での登場を示唆するため、その分身といえる「童子」もしくは「老翁」を前シテとして登場させた。童子／老翁は、聖地清涼山に相応しい聖性を帯びた存在として劇中での役割を担っているのである。

『石橋』は、文殊菩薩の示現する世界への到達の至難さを描いた作品である。その世界への到達が困難であればある程、聖性はその性質を強め、道を求める者にその超えがたさを乗り越えようとする超越を希求させる。人智で図りがたい超越的世界への導者として、童子／老翁が設定されているのである。

第六章 境界としての橋——彼岸と此岸の架け橋——

第四章と第五章で検討した、俗なるものと聖なるものとの相互交渉、その境界を超越し聖性へと飛翔せんとする求道心という劇的な構造が、『石橋』の主題である。二つの相対立する世界を結びつける象徴として橋がある。

天と地とを架け渡す天の浮橋、恐ろしい異人と遭遇する戻橋・安義橋・瀬田橋、境の神として橋を行き交う人々を守る橋姫、御霊・怨霊を鎮め穢れを川に送りやる雨宮の橋がかりの神事、文殊浄土の遙かな高みを象徴する石橋、橋の境界性や両義性、また説話や伝承を産出する橋の文化的象徴性を神話や伝承、また民俗事象を取り上げて検討した。

まずは、中国の古典説話も視野に入れ、日本神話や説話にみる橋を検討しながら、橋の境界性やその背後にある民俗的な心意を明らかにしてゆく。続いて橋の神事を取り上げ、民間信仰を基にした橋の表象に言及する。最後に仏教に現れる橋を検証することで、宗教世界と橋との関わりを考察した。求道者としての寂照にとって悟りは遠い目標である。現し身の囚われから解き放たれ浄土へと導かれるのは、頓悟の瞬間の出来事であるが、その超出の前には大きな困難が待ちかまえていることであろう。その苦しい試練の象徴として寂照の前に立ちふさがるのが「石橋」である。ここに石橋の宗教的意義がある。

第七章 獅子の舞

日本の獅子舞の源流は、飛鳥時代に日本に伝えられた伎楽だと考えられている。伎楽は、古代インド・チベットの仮面劇が中国南朝にまず伝えられ、さらに朝鮮半島の百済を通して日本にまで伝わった。大陸伝来の芸能としては最古のものである。続いて伝来した舞楽にも「獅子」があり、これらは宮廷や寺院の法会の場で演ぜられた。獅子舞の歴史は長く、

現在日本各地に民俗芸能の獅子舞が伝えられている。『石橋』の獅子舞を大陸の源流から辿りながら日本における獅子の歴史と芸能への展開を確認した。

日本の芸能は、もともと神事と深い関係にあり、演者と神とが一体となるその瞬間が芸能の一番の山場となる。神が憑りつき演者が神とともに舞い狂うのが日本の芸能の本質となるが、それに演劇的な様式を与えたのが能の獅子舞である。物狂いの芸能を演劇的な様式美へと昇華させた能の獅子舞が、歌舞伎舞踊の獅子物の演目へと引き継がれていったのも、演劇に採り入れられた獅子舞の完成度の高さ故である。

第八章 獅子と牡丹

花の王者である紅白の「牡丹」を一畳台二台に配した舞台の上で、「獅子」が壮麗に舞い、狂う。これが『石橋』の見せ場である。謡曲『石橋』に「獅子」と「牡丹」が取りあわされた要因をまずは牡丹の日本への伝来と文学的形象から探った。作者が数多くある花の中から牡丹を選んだのは、「牡丹に獅子」という連想が働いたからである。

そもそも中国での牡丹の歴史は古い。仏教伝来以前から中国では、牡丹を生薬として珍重してきた。中国河南省の洛陽で、後漢時代（六八年）最古の仏教寺院白馬寺が創建されたが、この洛陽が「牡丹」栽培に適した土壌であったことから、「仏教」と「牡丹」とが繋がる素地が出来た。唐代、楊貴妃が「牡丹」を好み、また李白「清平調」や白居易の牡丹詩を介してもはやされた結果、牡丹の文化は遣唐使らによって我が国にもたらされた。牡丹も獅子も本来日本にはないものである。牡丹はともかく獅子に至っては中国にも存在しない。これら動植物は大陸伝来であるため見慣れないもの、また観念上での形象にしかすぎない。このような対象であった牡丹や獅子がどのように古典の世界で具象化されていたのか、日本への伝来とその受容の問題も含めて論証した。

終章

第一章から第八章までの各章の論証を踏まえて、最終的には、謡曲『石橋』が聖と俗との交錯、さらには俗なるものから聖なるものへの昇華を主題とする、精神性の高い作品であることを明らかにした。

本研究をとおして、『石橋』の物語世界をその歴史的・思想的・宗教的背景の中に位置づけることが、博士論文の最終目的となる。

『石橋』が聖と俗との交錯、さらには俗なるものから聖なるものへの昇華を主題とする精神性の高い作品であることは、各章がそれぞれの観点から示している通りである。テキストとしてはごく短い作品であるが、その包含するものは深く大きい。

南北朝時代から唐代にかけて形成された文殊菩薩信仰を背景として、『華嚴経』の経説に基づいて文殊菩薩の浄土となったのが清涼山である。

『石橋』は、本来は天台山にあるはずの石橋をこの霊山に配することで、彼岸の浄土と此岸との超えがたい距離を描き出している。

ワキに配された寂照は、入宋し五臺山巡礼を果たした実在の高僧であるとともに、説話世界では愛執に苦悩した過去を持つ求道者である。此岸的なものへの執着を乗り越え彼岸的なものへと身命を賭して向かってゆこうという、彫りの深い人物像となっている。このような人間像を通して文殊菩薩の浄土の超越性が描き出されている。

寂照は文殊の眷属である獅子が牡丹の花のもとで舞うのを見ることができただけであった。これが、佛教の至高の世界の到り難さを示しながら、同時にそこへと誘うものとなっている。求道僧の寂照、牡丹のもとで舞い狂う獅子、そして舞台となる五臺山の目もくらむ石橋を一つに組み合わせることで、仏教的世界観を印象深く描いた『石橋』の構成力に、室町時代の能楽師たちの知識レベルと芸術的な造形力を窺うことができる。

文殊菩薩の浄土を演目の舞台にしたことにより、獅子舞を崇高なる次元へと昇華させることが可能となったのである。日本の獅子舞文化の転換点となった能『石橋』を総合的に考察した本研究論文の価値はここに存する。